



「中台統一」加速はない 李登輝前総統

2008.3.26 08:46

【台北＝河崎真澄】台湾の最大野党、中国国民党の馬英九前主席(57)が圧勝した22日の総統選挙を受けて、李登輝前総統(85)は台北市内で産経新聞と会見し、「中国共産党は馬英九氏を支持してはいない」と述べ、中台関係が「兩岸統一」や「共同市場」に向け一気に進む懸念はないとの見方を示した。また国民党政権と馬氏に対し、「一党支配をもって民主化を進めるべきだ」として、行政や立法で一手に握ることになった権力を「民主化」に集中させるよう求めた。

対中融和策を推進する国民党の8年ぶりの政権奪還で、台湾が中国の統一工作に取り込まれるとの指摘について、「(戦後の)台湾の帰属問題は不明瞭(めいりよう)だと中国はよく研究している。簡単に統一はできない。しばらくは安全だ」と話し、米国の介入を念頭に、懸念を一(いつ)蹴(しゅう)した。また「馬氏は米国寄り。中台統一に持ち込むことはない」とした。

李氏の総統時代、馬氏は法相を1993年から96年まで務めている。馬氏の人物評について、「彼は中国人(大陸出身者)だが、正直者で汚職をしない近代的な人物。ただ、独りよがりな面もある」と述べた。さらに「(李氏の日本語の近著)『最高指導者の条件』を馬氏に手渡す予定だ」と語り、近く馬氏と会う可能性を示唆した。

馬氏は尖閣諸島の帰属問題などで厳しい対日姿勢もとってきたが、李氏は「総統になった以上、(対日関係で)謙虚になる必要がある」と指摘。「台湾は(中国より高度な)技術力が必要で、そのためにも技術提携など日本との関係をよくすべきだ」と対日関係の前進を強く促した。

その上で「やってくれと馬氏に言われれば、駐日代表は年齢的に無理としてもフリーな立場で手伝うことができる」と述べ、生涯をかけて自身の日本の政財界人脈や経験を、馬次期総統が率いる台湾のために生かす意向を明らかにした。

これまで「独立派」と見なされてきた李氏の発言は台湾内外の反発も招きそうだが、現実を直視し、将来を見つめるようにという、85歳の李氏が政治生命をかけた問いかけといえる。